

# 『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」について

平井一博\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 先行作品の「かすみ」「かすむ」
  3. 『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」
  4. おわりに
- 

## 1. はじめに

霞は春を代表する景物の一つであり古典作品中に数多く登場する。但し中国漢詩文中の「霞(カ)」と和語「かすみ」は別の現象を指し、日本でも漢詩文と和文においては別々に受容されていることについて、既に小島憲之氏が指摘されている<sup>1)</sup>。このうち和語「かすみ」について、いま試みに秋山虔編『王朝語辞典』<sup>2)</sup>によりそのイメージや属性を簡単にまとめると、

- 「春霞」といわれ、秋の「霧」に對する春の代表的な景物
- 立春の景物
- 春よみがえるうららかな光景をかたどる重要な景物・早春に限らず、春の季全体を通しての景物
- 物を隠すものであり、秋の霧が紅葉を隠すのに對して花などだいじなものを隠すと詠まれることが多い

ということになる。

これが韻文（上記の通り、漢詩を除く）・散文を問わず古典文學を通しての「かすみ」の基本的なイメージであり属性であることは紛れもない。ただ散文作品中にはこれに収まらぬものも間々見受けられ、特に『源氏物語』においてそれが顯著に表れているように思われる。本稿ではこの『源氏物語』を中心に「かすみ」「かすむ」の種々相を確認し、それらを整理・分類して、

---

\* 培材大學校 講師 日本古典文學（平安時代）

1) 小島憲之「上代に於ける詩と歌—「霞(カ)」と「霞(かすみ)」をめぐる—」（『万葉學論攷 續群書類従 完成會、1990）

2) 項目執筆者は平澤龍介氏

そこから考えられる問題点をいくつか指摘してみたい。

なお、名詞「かすみ」と動詞「かすむ」を同次元に並べて扱ってよいかという疑問は當然考慮せねばならない点であるが、管見の限りでは両語とも春以外の季節に用いられた例は見られない。つまり季節に關係なく物がぼんやりと見えている状態を「かすみ」もしくは「かすむ」と言っている例は見当たらないのである。どちらも春という季節に限定して現れ、しかも兩者の間に現象面での明確な違いは認めにくい。ここでは暫く同列に扱うこととする。

## 2. 先行作品の「かすみ」「かすむ」

こと散文作品に限って言えば、『源氏物語』に先行する作品に「かすみ」「かすむ」の用例は少ない。『竹取物語』『平中物語』『土佐日記』『和泉式部日記』などには見えず、その他の作品においても多くは和歌及び歌題・和歌序の部分に用いられている。むろんこれらは先に確認した霞の一般的理解の範疇に収まるものである。今はこれらの例は割愛し、散文部分に用いられたものについてのみ触れていくこととする。

①俊蔭、清く涼しき林にひとりながめて、琴の音をあるかぎりかきたてて遊ぶに、三年といふ年の春、この山より西にあたる花園に移りて、琴ども並べ置きて、大きな花の木の陰に宿りて、わか國のこと、父母のこと思ひやりつつ、聲まさりたる二つの琴を試みる。春の日のどかなるに、山を見れば霞みどりに、林を見れば木の芽けぶりて、花園花盛りにおもしろく、照る日の午時ばかりに、琴の音をかきたて、聲ふりたてて遊ぶときに、大空に音聲樂して、紫の雲に乗れる天人、七人つれて下りたまふ。(宇津保物語、俊蔭、①p29) 3)

②「……春は、霞、ほのかなる鶯の聲、花の匂ひを思ひやり、夏の初め、深き夜の時鳥の聲、曉の空の氣色、林の中を思ひやり……」(宇津保物語、樓の上 上、③p446)

③かの語らひけることのすぢもぞ、この文にある。かつは思ひやるこちもいとあはれなり。よろづ書き書きて、「霞にたちこめられて、筆の立ちども知られねばあやし」とあるも、げにとおぼえたり。(蜻蛉日記、下、天祿三年 p283) 4)

④十五日、地震あり。大夫の雑色のをのこども、「地震す」とて騒ぐを聞けば、やうやう酔ひすぎで、「あなかまや」などいふ聲聞こゆる、をかしさに、やをら、端のかたに立ち出でて見出だし

3) 『宇津保物語』引用は新編日本古典文學全集(小學館)により、巻数と頁数を示す。以下同じ。

4) 『蜻蛉日記』引用は新編日本古典文學全集(小學館)による。以下同じ。

たれば、月いとをかしかりけり。東ぎまにうち見やりたれば、山霞みわたりて、いとほのかに、心すごし。柱に寄り立ちて、思はぬ山なく思ひ立てれば、八月より絶えにし人、はかなくて正月にぞなりぬるかとおぼゆるままに、涙ぞさくりもよよにこぼるる。(蜻蛉日記、下、天延二年、p321)

⑤正月朔は、まいて空の氣色もうらうらと、めづらしう霞みこめたるに、世にありとある人はみな、姿かたち、心ことにつくろひ、君をも我をも祝いなどしたる、様ことに、をかし。(枕草子、二段、p1) 5)

⑥四月、祭の頃ころいとをかし。(中略) 木々の木の葉、まだいとしげうはあらで、若やかに青みわたりたるに、霞も霧も隔てぬ空のけしきの、何となくすずろにをかしきに、少し曇りたる夕つ方、夜など、忍びたる郭公の、遠く空音かとおぼゆばかり、たどたどしきを聞きつけたらんは、何心地かせん。(枕草子、二段、p3)

⑦日はいとうららかなれど、空はみどりに霞みわたれるほどに、女房の装束のにほひあひて、いみじき織物、色々の唐衣などよりもなまめかしう、をかしきこと限りなし。(枕草子、二六三段、p209)

⑧またの日、夕つかた、いつしか霞みたる空を、つくりつづけたる軒のひまなさにて、ただ渡殿の上のほどをほのかに見て、中務の乳母と、よべの御口ずさびをめできゆ。この命婦ぞ、ものの心えて、かどかどしくははべる人なれ。(紫式部日記 寛弘六年正月三日) 6)

①は俊蔭が天人と出會い秘琴を伝授される場面であるが、ここでの「霞」は單なる春の風景描寫とするよりも、神仙世界を象徴する景物の一つとして機能していると考えらるべきであろう。「霞洞」「霞杯」など神仙思想と結び付く漢語「霞」は漢詩文中には珍しくないが、先に確認した和語「かすみ」の一般的理解の範疇には収まりきらぬものの一つである。

これに對して②はそれぞれの季節を代表する景物を並べているだけである。⑤は春の訪れを告げる景物としての一般的用例。⑦⑧は美しい春の景色の敘述としての一般的用例と考えてよいと思われる。⑥は四月、即ち夏という季節にしかも霧と並べられている点が目を引くが、これは要するに「何も遮るものもなく澄み渡っている」ことを強調してゐるのであろうから取り立てて特殊な用例というのではない。

注意すべきは③④の『蜻蛉日記』の例であろう。③はかつて兼家が源兼忠女に生ませた娘を養女に迎えるに当たり、文のやりとりをする場面である。生活不如意な折から、喜びつつも悲し

5) 『枕草子』引用は和泉古典叢書(和泉書院)による。以下同じ。

6) 『紫式部日記』引用は新編日本古典文學全集(小學館)による。

みを抑えられぬ兼忠女からの返事の中でやるせない気持ちを「霞にたちこめられて」と言っており、ここでの「霞」は心情の比喩として機能している。また④は夫兼家にうち捨てられたような状態にあることを述べる文脈である。この「霞み」を心象風景とまで言ってしまうは言い過ぎかもしれないが、「霞みわた」っている景色を「いとほのか」なだけでなく「心すごし」と評している部分から、わずかにそのような雰囲気を感じ取ることはできるのではないか。このような例に『源氏物語』の先蹤を見ることができそうである。このことは次でもう一度述べる。

以上、先行作品の「かすみ」「かすむ」については、わずかな例外を除き一般的な理解から大きく逸脱するような例は見られないこと、その中で『宇津保物語』の1例及び『蜻蛉日記』の2例は注目すべきものであることが確認できたかと思う。

### 3. 『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」

『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」について、森岡常夫氏は「霧」との比較の上で「小野の山里や宇治の山荘の霧の世界のように、印象的に描寫されてはい」ず、あくまでも「霞は長閑かな、ほのぼのとした春の風情をあらわすもの」であり、そこには「駘蕩とした春らしい雰囲気か窺われ、そのようなところから「霞は「をかし」であるに對して、霧は「あはれ」というべきものである」という見解を提示されている<sup>7)</sup>。このような見解も視野に入れて『源氏物語』中の「かすみ」「かすむ」の例を再検討してみたい。

当然ながら『源氏物語』中でも「かすみ」「かすむ」は

#### A 春の訪れ（立春・早春）を告げるもの

日のいとうららかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなきななかにも、梅はけしきばみほほゑみわたれる、とりわきて見ゆ。（末摘花、①p283）<sup>8)</sup>

#### B （早春に限らず）春の美しい風景を描寫するためのもの

明けゆく空は、いといとう霞みて、山の鳥ども、そこはかとなくさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花ども、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみありくもめづらしく見たまふに、なやましきもまぎれ果てぬ。（若紫、①p202）

7) 森岡常夫「源氏物語の霧」（『源氏物語の考究』風間書房、1983）

8) 『源氏物語』引用は新潮日本古典集成（新潮社）により、巻数と頁数を示す。以下同じ。

C 何かを隔てるもの、立ち隠すもの

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。(若紫、①p189)

というのが基本的な現れ方である。その他として

D 文飾・引歌として用いられているものがあるが、これには

御消息、僧都のもとなるちひさき童して、

夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ

御返し、

まことにや花のあたりは立ち憂きと霞むる空のけしきをも見む

と、よしある手のいとあてなるを、うち棄て書いたまへり。(若紫、①p204)

のように「霞が立つ」に「立つ(立ち去る)」を掛けるものや

光もなく黒き搔練の、さるさるしく張りたる一襲、さる織物の袿を着たまへる、いと寒げに心苦し。かさねの袿などは、いかにしなしたるにかあらむ、御鼻の色ばかり、霞にもまぎるまじくはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくろひ隔てたまふ。

(初音、④p21)

のような比喩、また

月かげは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな

霞も人のとか、昔もはべりけることにや」など聞こえたまふ。(賢木、②p168)

のように引歌による表現がある(この部分、『紫明抄』ほか「山櫻見に行く道を隔つれば霞も人の心なりけり」を引歌として挙げる)<sup>9)</sup>。これら全てに触れるのは到底紙数が許さない。またA～Cは「はじめに」で示した霞の一般的理解の範囲内に留まるものであるし、Dはそこからの応用であるからあえて触れる必要もないであろう。以下、これらに当てはまらぬものを中心とし、必要に応じてそれ以外の例も参考にしつつ考察を進めていくこととする。

9) 「霞も仲を隔てる点では人の心と同じように意地悪だ、とか詠まれています、昔もあったことなのではないか。」(新潮日本古典集成頭注)

まず、若紫巻に集中してこの語が表れる点は注意してもよいだろう。とりわけ次の2例は（春の美しい風景を描寫するものであり特殊な用いられ方ではないが）北山という土地の印象を形作るのに大きな役割を果たしている。

三月の晦日なれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の櫻はまださかりにて、入りもておはするまに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、所狭き御身に、めづらしうおぼされけり。（若紫、①p183）

君は行ひしたまひつつ、日たくるまに、いかならむとおぼしたるを、「とかうまぎらはさせたまひて、おぼし入れぬなむ、よくはべる」と聞こゆれば、後の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、繪にいとよくも似たるかな。「かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、……（若紫、①p185）

森岡氏も指摘されている<sup>10)</sup>が、この巻の舞台である北山のなにかし寺は都を遠く隔てた別世界であり、そこで光源氏は若い若紫、後の紫の上と出会う。新しい女君の登場にふさわしい、この世のものとも思えぬ美しい土地の描寫に、霞が効果的に用いられていると言えよう。

都を遠く隔てた別世界ということ言えば、流浪の地、須磨を描寫する次の例も同じである。

うちかへりみたまへるに、來し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の心地するに、權の雲もたへがたし。

ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空は同じ雲居か  
つらからぬものなくなむ。（須磨、②p225）

ただ、若紫巻の例がこの世のものとも思えぬ美しい土地の描寫という点でBの「春の美しい風景」の描寫の延長線上にあるのに對し、この須磨巻の例は違う。和歌の中に「へだつれど」とあるので前記の分類によるならCに入れるべきものかと思われるが、遠い都を思い、霞の向こうに見えぬ都を見ようとするこの場面において、この「霞」はもう一步でむすぼれたる心の心象表現になり得る例と言っていいのではなかろうか。

また次の例は和歌の中に現れるものであるが、文節の上でこれも一種の別世界を表すものと考えられるかもしれない。

舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ。

鶯のさへづる聲は昔にてむつれし花の蔭ぞかはれる

---

10) 同氏1) 論文。

院の上、

九重を霞隔つるすみかにも春と告げくる鶯の聲 (少女、③p268)

朱雀院が自らの居所を「九重を霞隔つるすみか」と言っている。周知の通りこれは院の御所（仙洞御所）を仙人の住まう所に準える表現である。あくまで文飾の上でであるが、神仙世界を描寫する道具立ての一つとして用いられている点で、先の『宇津保物語』の例①と同種のものと考えることができよう。

以下の例は、今までのものとはいささか趣を異にしている。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御疊紙に、

木の下の雲に濡れてさかさまに霞の衣着たる春かな  
大將の君、

亡き人も思はざりけむうち捨てて夕の霞君着たれとは  
辯の君、

うらめしや霞の衣誰着よと春よりさきに花の散りけむ (柏木、⑤p311)

柏木が逝き、残された父と弟は故人の親友だった夕霧ともども哀悼の歌を詠む。ここでは「鈍色に霞みて」とあり、霞は白いものですらない。喪服の色である鈍色に霞んだ夕暮れの風景は、残された者たちの心象とそのまま重なり合うものではなかろうか。また和歌中の「霞の衣」は「かすみ」に「墨」を掛けており、喪服（墨染の衣）のことを指すと説明される。そうには違いないが、ここの「霞の衣」は先の「鈍色に霞みて」という描寫と響き合い、陰鬱な風景がそのまま鈍色という陰鬱な色と重なっている。

そもそも歌語「霞の衣」は、『古今集』以来の伝統的世界にあっては

はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ  
(古今集、卷1、23、在原行平朝臣) 11)

のように霞そのものを指すのであって、『源氏物語』以前に喪服のことを指す確例は見当たらないようである<sup>12)</sup>。だとすれば、この場面における霞はよりいっそうに、一般的なイメージや屬性とは離れたものであるということになろう。ここでの「鈍色に霞」んだ空は、歌語「霞の衣」と

11) 『古今集』引用は新編國歌大觀 (角川書店) による。

12) 横井孝「『源氏物語』の表現・斷章―「霞の衣」を中心に―」(『静岡大學教育學部研究報告』37、1987)

も相俟って、死別の悲しみを描寫する一種の心象表現を形作っていると言えはしないだろうか。  
宇治の巻々に入ると次のような例が見られるようになる。

こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御ことをぞ、まづはいかにと、宮は聞こえたまふ。中納言も、過ぎにしかたの飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、をりをりにつけて、あはれにもをかしくも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞こえ出でたまふに、まして、さばかり色めかしく、涙もろなる御癖は、人の御上にてきへ、袖もしほるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる。空のけしきもまた、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる。(早蕨、⑦p129)

大君逝き、傷心の薫が匂宮と語り合う場面。「空のけしき」が「あはれ知り顔に霞みわた」っているというこの描寫は、「あはれ知り顔に」という部分が如實に示している通り、まさに大君を失った悲しみの心象表現として機能していると考えてよいであろう。

また宇治の浮舟から異父姉中の君のもとに届いた消息には以下のようにある。

……いと若やかなる手にて、  
おぼつかなくて年も暮れはべりにける。山里のいふせきこそ、峰の霞も絶え間なくて。  
とて、端に、「これも若宮の御前に。あやしうはべるめれど」と書きたり。(浮舟、⑧p16)

ここでの「峰の霞」は山深い宇治で一人過ぐす浮舟の「いふせ」き思いの比喻であり、先に見た『蜻蛉日記』の③と軌を一にするものであろう。

更には、

山のかたは霞隔てて、寒き州崎に立てるかささぎの姿も、所からはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほそのかみのことのただ今のこちして、いとかからぬ人を見かはしたらむだに、めづらしき仲のあはれ多かるべきほどなり。(浮舟、⑧p47)

亡き大君を思う薫、薫と匂宮の間で揺れる浮舟、二人は寄り添いながらも全く別々の思いの中にいる。この二人がそれぞれの思いを抱きながら見つめる宇治川の畔を描寫したこの部分でも、荒涼とした心象を描く道具立ての一つとして霞が用いられているのではないかと考えられる。これはまた先の『蜻蛉日記』④と通底するものではなからうか。

このように見てくると、『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」は、古今集以来の伝統的な屬性

やイメージの範疇で用いられているものも多い一方で、その枠に収まりきれないものが生まれていると書いていいであろう。

## 4. おわりに

以上『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」について、霞の一般的理解の範囲に留まらない例を中心として考察してきた。結果として、「長閑な、ほのぼのとした春の風情をあらわすもの」というにはそぐわない例のあることが確認できたかと思う。では、これを以て『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」には「悲しみの表象として描かれるもの」という新たな属性なりイメージなりが加わったとまで言い得るであろうか。筆者はそこまで言い切ることは慎重でありたいと思う。これらは望郷であったり死別であったり、或いは心晴れぬいぶせき思いを抱くといった場面であったりという、もともと暗色の世界である。そこに置かれた霞の描寫は、そういった場面の必然性によりたまたま悲しみの表象として機能しているに過ぎないとも考えられるからである。

ただそれでも、霞は單に春の長閑さや美しさを描寫するだけのものでないことは否定できないであろう。少なくとも、暗く陰鬱な場面を描く道具立ての一つとして用いられても不調和を來さないものであることは確かである。そして霞をそのように用いたという点が『源氏物語』の新しさであったと考えたい。

更に、霞という景物をいぶせき思いの喩えとしたり、そのような感情を吐露する場面に配したりすることについては、先述の通り『蜻蛉日記』にその先蹤が認められる。『源氏物語』が『蜻蛉日記』から受け継いだものは数多い。例えば、平安朝の散文は『蜻蛉日記』に至って感情や思惟といった個人の内面を深く掘り下げて描く手法を獲得した。更に『源氏物語』においてそれが確立されたことは周知の通りである。霞に関して言えば、『源氏物語』は『蜻蛉日記』の先蹤を踏まえ、更にそれを死別の悲しみを描く場面に用いるという形で發展継承したとすることができるのではなかろうか。

であるとすれば、『源氏物語』以後の、いわば『源氏物語』を受け継いだ作品群では「かすみ」「かすむ」はどのように描かれているかという問題が新たに派生してくる。例えば『源氏物語』の強烈な影響下に成立した『狭衣物語』には次のような例が見える。

出でぬる名残も端つかたにてながめ臥したまへるに、空いたう霞みわたりて、月の光も少しおぼろなるを、涙にくもるにや。(狭衣物語、卷二、①p252)

狭衣が、入水した飛鳥井の女君を偲ぶ場面。「霞みわた」った空にかかる月が朧ろであるのは

「涙にくもる」からだろうか、と言っている。これは霞んでいる状態を「涙にくも」っていることと重ねているのであり、明らかに悲しみの心象表現であろう。このように、『源氏物語』と同様、死別の悲しみを敘述する部分で霞が描かれている例がわずかながら認められるのである。この他にも『源氏物語』以後の作品で「かすみ」「かすむ」がどのように描かれているかについては、いずれ稿を改めて考察してみたい。

## 【参考文献】

- ・秋山虔編（2000）『王朝語辞典』、東京大学出版会、p112
- ・小島憲之（1990）「上代に於ける詩と歌—「霞（か）」と「霞（かすみ）」をめぐる—」『松田好夫先生追悼論文集 万葉学論攷』續群書類従完成会、p27-44
- ・森岡常夫（1983）「源氏物語の霧」『源氏物語の考究』風間書房、p90-109
- ・横井孝（1987）「『源氏物語』の表現・断章—「霞の衣」を中心に—」『静岡大学教育学部研究報告37』、p21-36

## 要 旨

平安朝の文學作品において、「霞」は一般的に春の長閑で駉蕩とした風景を描寫する景物として理解されている。和歌はむろん散文においてもそれが基本的なイメージであり屬性であることは間違いない。だが散文作品中にはそれに収まり切らぬ例が間々見受けられ、殊に『源氏物語』ではそれが顯著である。そこで本稿ではまず、『源氏物語』に先行する散文作品の「かすみ」「かすむ」について檢証した。結果として、『宇津保物語』と『蜻蛉日記』にそういった一般的理解からは離れた例があることが分かった。中でも『蜻蛉日記』はやるせなく悲しい思いを描く場面に霞を比喩もしくは心象表現のように用いている。

次に『源氏物語』の例を檢証してゆくと、一般的理解の範疇に留まるものが多い反面、『蜻蛉日記』と同様の用法が見られることが分かった。『源氏物語』はおそらく、人間の内面を描く手法の一つとして『蜻蛉日記』からこの用法を受け継いだのであろう。更に『源氏物語』では、死別の悲しみを描く場面の心象表現として霞が用いられている例をも拾い得る。『源氏物語』は『蜻蛉日記』から受け継いだものを發展させ、新しい用法を確立した。この点が『源氏物語』のオリジナリティーであり新しさであると考えられる。そしてこの用法は『源氏物語』以後の作品群へと引き継がれてゆくであろう。その一つとして、『源氏物語』の強烈な影響下に成立した『狭衣物語』には、同じく死別の悲しみを描く心象表現としての「霞」が認められるのである。

キーワード：かすみ、かすむ、『源氏物語』、『蜻蛉日記』、内面描寫、心象表現、死別、  
『狭衣物語』

투 고 : 2005. 11. 30  
1차 심사 : 2005. 12. 10  
2차 심사 : 2005. 12. 31